

1970年代に企業爆破事件を起こし、逮捕された大道寺将司は当時26歳。死刑判決を受けてからは、外部の人と会うことも折々の風光や草木に触れることもない極限の日々を過ごしている。そんな日々の深い思念を語る自己または他者として選んだのが俳句であった。しおりを執筆した福島泰樹は「峻厳な『生き様』の詩型として俳句を選んだのである」と記している。本書は2012年以來の490句を所収。乱れのない有季定型である。ときに句座をともにしているかの

「残の月 大道寺将司句集」

大道寺 将司著



太田出版・2592円

よつな錯覚を抱かせるが、著者は野の夕焼けも川瀬の音も、26歳までに得た記憶の景を言葉で再生させつつ一句一句を紡いでいるのである。季語は折々の心象を

具現する言葉として機能し、言えぬ多くを季語に語らせているのだ。
 ▲大寒の空のはたての蒼さかな
 ▲秋雨の濡れし山河をひた濡らす
 ▼など定型

加害の記憶と悔悟

本態の格を持ち、▲寒風に歪む骨身を押しゆけり
 ▲身にしむる汗に感ひし
 ▲くらはぎなどほ、肉体の得た感覚を季語の中に投じている。

26歳より前の記憶の景は年々の景として季節ごと

よみがえる。▲水澄みて刹那の記憶新たにす。古い記憶に新たな記憶が重なる。

通読後の印象をひと言でいうなら、著者の後書きの

かつて身を賭けて一事のために行動した作者の意思はその後も不断に保持されており、▲被曝せる獣らの眼に寒風
 ▲セシウム
 の記憶薄れし神無月
 ▲薄氷の割れて開戦前夜かな
 など、社会問題に敏感に反応する。▲鬼門越す骸を花の見送り
 ▲ひそやかに骨の泣く音や春の霜
 ▼などは集中の佳句。作者は現在がんを病み病舎に暮らす。身の苦痛軽からんことを祈るばかりである。

(宇多喜代子・俳人)